KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

言葉が生み出す欲望と主体性：自分とは何か。自分らしさとは何か。

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 関西外国語大学
	公開日: 2016-09-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 朴, 育美
	メールアドレス:
	所属: 関西外国語大学
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/5722

言葉が生み出す欲望と主体性
―自分とは何か。自分らしさとは何か。―

外国語学部准教授　朴 育美

１．はじめに

一昨年は、その号泣シーンで海外のマスコミからも注目されたＮ議員をはじめ、政治家による政務活動費の使われ方や、大学における研究費の使われ方などが大きく問題になった一年だった。人々の税金から支払われる公金を、なりふり構わず使い切ろうとする地方議員の行動が、マスコミで詳細に報道されるのを見て眉をひそめた人も多いだろう。しかし、繰り返されるこのような問題を、ただ単に個人のモラルの問題に収斂させてしまえるだろうか。

一連の報道を見ながら、トルストイの短編「人にはどれだけの土地がいるか？」[1]を思い出した。はじめはつつましやかな生活に、それなりに満足して暮らしていた、百姓のパホームは、だんだんと機会を得て、より多くの土地を所有するようになる。ところが不思議なことに、いざ土地を所有するようになると、しかも土地が増えれば増えるほど、パホームは、より一層「足りない」と感じるようになっていく。まだ足りない。まだ足りないという思いから、より多くの土地の所有に追い立てられるようになったパホームは、最後に訪れた村で、またとないオファーに出会う。広大な土地を持つその村では、わずかなお金と引き換えに「日の出から日の入りまでに、歩いて囲んだ土地をすべてさしあげる。ただし日没までに出発点に戻れなければすべてはふいになりますが」というのだ。

パホームは、一日で歩く配分を綿密に考え、最大限の土地を所有せんとして、当日を迎える。しかし、はじめは、意気揚々と歩き始めたものの、想像以上の暑さと疲労のために、次第に思うように進めなくなっていく。時間

1　トルストイ、レオ　「人にはどれほどの土地がいるか」『トルストイ民話集　イワンのばか　他八篇』中村白葉訳、岩波文庫、2014年、p.73～104

が経つにつれ、日没までに戻らなければ、全てがふいになってしまうという焦りと、極度の疲労に苦しみながら、死に物狂いで歩き続けるパホーム。ついに日没ぎりぎりに、倒れこむように出発点に戻ってきたものの、その場で息をひきとってしまう。結局、彼に必要だったのは、その遺体が埋められるだけの土地であった、というくだりで物語は終わる。

よくある勧善懲悪型の、欲望を戒める物語とは違って、この物語の主人公は、決して全き悪人ではない。ごく普通の人間に訪れるちょっとした幸運。しかしその幸運（土地を所有できたという状況）が、もっと所有しなくてはならないという渇望を生み出し、満たされるという思いから、どんどんと男を遠ざけてしまう。欲望がつつましやかなものから肥大化していく宿命、その過程で主体のコントロールを逃れ、いつかは主体を支配する魔物と化していくプロセスは、人間の欲望の普遍的、構造的な本質を臨場感たっぷりに読者に突きつける。

物語では、悪魔が登場し、男の欲望の肥大化の原因は「悪魔の仕業」ということになっている。しかし、外部に悪魔を設定せずとも、人間はその内部に、可能性としての悪魔を抱えている。欲望は、ちょっとしたきっかけさえあれば、意識のコントロールを超え、じわじわと私たちをコントロールする悪魔と化す。今マスコミに糾弾されている政治家も研究者も、よもや初めから、自分が、割り当てられた公金を、いかに期日までに使い切るかに、全力を使うような人間になるとは、想像していなかっただろう。人はなぜ、知らぬうちに欲望にコントロールされるようになるのか。

ここでは、普遍的なテーマとして、改めて欲望について考えてみたい。フロイト、ラカンの精神分析は、欲求、要求、欲望を区別し、本能的な欲求が満足と結びつくものであるのに対して、欲望は、満足にとどまることができないという。なぜならラカンいわく「欲望はそれ自体の持続を求めることをその本質とする」からである。では、なぜ欲望は、満足に留まれず、連鎖していくのか。もし連鎖が逃れられないものであるならば、その連鎖の中で、私たちは、どのように欲望とつきあえばいいのか。精神分析の理論を援用しながら、欲望と細く長く付き合うすべを考えてみたい。

２．欲望の原因：言語的出自

そもそも欲望はどのように現れるのか。欲望の出自を明らかにするには、まず言葉と意識の関係を明らかにしなくてはならない。なぜなら欲望が生まれるには、言葉とわたし（主体）が必要とされるからだ。通常私たちは、自分の考えを、言語を媒介して外に伝えると思っている。しかし、私の考えは、言葉なしにはありえない。私たちは言葉を使って考えたことを表現するが、その考えも、「私」という概念自体も、言葉から生み出されたものである。私たちは、言葉と分断されて存在するのではなく、私たちは言葉と共存して、初めて存在するのであり、言葉を操る存在であると同時に、言葉に操られる存在であるということだ。だから私たちが自分の意識や考えや、そして欲望について考えるときも、まず言葉の力に十分注意を払わなければならない。

ミッシェル・フーコー（1926－1984）が、言説に従属することによって主体性を得るのが人間であると指摘したのをはじめ、言語論的展開以降の様々な研究は、言語活動の外部にあって、それを自律的に操作できる人間主体を否定し、人間主体というものが言語活動に内在的であるということを明らかにした。それらの研究は、私たちの考えは、私たちが話すその言語の、社会的文化的価値観のみならず、その言語の文法や慣習的なルールに、無意識のうちに拘束されることを、様々な角度からあきらかにしていった。

カミュの小説『異邦人』[2]で、主人公のムルソーが、人々の憎悪の対象になっていくプロセスも、言説と主体性との関系に当てはめてみることができるかもしれない。殺人を犯した理由を問われ「それは太陽のせいだ」と答えたムルソー。母親が亡くなった翌日に、海で女性と一緒に泳ぎ、帰りにはコメディ映画を見、一夜を共にしたムルソー。裁判で、聴衆に対して自分を正当化することも、”お約束の受け答え”もできなかった彼は、「人でなし」という烙印をおされ、人々の憎悪を一身に受ける。彼を擁護する、数少ない友人たちの証言も、その憎悪の前には何の意味もなさない。法廷での言語ゲームを知らない彼らの言葉は、発話とともに、すでに排除されているのだ。

２　カミュ、アルバート　『異邦人』窪田啓作訳、新潮文庫、2004年

しかし、ムルソーは、果たして悪人だったのだろうか。否、言葉で自分を粉飾することに、無関心だったという点で、彼はむしろ、誰よりも素直で誠実だったのではないか。彼にできなかったのは、”正しく”言語を使い、”正しく”人々の欲望に答えることだった。ムルソーが、社会で慣れ親しまれた言語のやり取り、振る舞いに平然と従わないことは、人々の嫌悪と怒りを掻き立てた。言説に従属することができなかったムルソーは、コミュニケーションがとれない「異邦人」であり、人間ではない。それが彼を、人でなし、人間でないものにした。

このことは逆に、人間として認められるということが、どういうことかを教えてくれる。人間として認められるためには、母親が亡くなった時には、どのような言葉や表情で、正しく悲しむのか、慰めの言葉には、どのような言葉で返答するのか、言語のやり取りに基づく、生活様式のこまごまを身につけた者でなければならないのだ。言説空間では、自発的な感情としてとらえられる悲しみも、共有されたルールを介して、はじめて表現され、伝えられる。例えば海外の映画やドラマを見ていて気付かされるのは、何が悲しみの対象になるか、ということだけではなく、悲しみを表現するためのボキャブラリーの種類や使い方、手振りや身振りまで、それぞれの社会や時代に特有のルールがあるということだ。言説に従属するとは、私たちの生活を取り仕切る無数の”お約束”に、約束をした覚えも、従っているという意識もなく、“自然に”従えるということだ。

もう随分前になるが、アメリカで知り合った、共産主義国から来た学生が、「アメリカに来てから（自分の国を）批判できるようになった。自分の国にいるときは批判を聞く機会がほとんどなかったから、どうやって批判するのか、批判するとはどういうことかががわからなかった。」といっているのを聞いたことがある。批判が批判として、機能するためには、そこで使われるボキャブラリーを共有する話し手と聞き手の存在、つまりそのような議論を成り立たせる言説空間が欠かせない。批判できる主体になるためには、批判の概念やそれを支えるボキャブラリーが、言説空間で生成している時でなくてはならない。

これは、マイノリティの人々がVoicelessと呼ばれる状況に似ている。Voicelessとは、「言いたいことがあるのにそれを聞いてもらえない」という状況ではない。それは、自分自身の状況や経験が、語りに値するものであるという認識や言葉から、奪われている状況であり、それゆえ「語る主体」になれない状況である。人が声を持つ主体になれるのは、言説空間にある欲望、（それを否定するという形であっても）に何らかの形で答えた時だけなのだ。語る主体である「わたし」は、言説空間の欲望に答えることで、構成されていくものなのだ。

「シニフィアン（言葉）は主体を他のシニフィアンに対して代表象する」というラカンのテーゼ[3]は、私たちが言葉、（ラカンの言葉でいえばシニフィアン）を使って自分を表象するというよりは、言葉がわたしたちを通じて、他の人に対して（厳密には他の人の言語活動に対して）表象するとし、私たちの存在が、他者との言葉のやり取りに依拠していることを指摘する。わたしたちが、他者とかかわれるのは、シニフィアン、つまり言語活動というフィルターをとおしてのみであり、言語活動が、わたしをわたしたらしめるということだ。

しかし、言語というフィルターは、私たちにいつも、言語の身の丈に合わせて自分を表象することを要求する。精神分析は、言葉というフィルターを通じてしか、世界と関われなくなったことが、人間と自然の間に決定的な乖離を生じさせたという。本能によって自然と一体化できる動物とは違って、言語的な存在となった人間は、本能に導かれて、自然と一体化して生きることができなくなった。動物のように、本能によって生を駆動することができなくなった人間は、言葉によって生み出される欲望によって、生を駆動していく。そして言語によって生み出される、意識的にまたは無意識的な欲望は、常に根底では、言語を通じて他者と結びつけられている。ラカンが指摘するように、「他者」とは、突き詰めれば、言語の世界それ自体なのだ。

3　新宮一成、立木康介編、『知の教科書　フロイト＝ラカン』講談社、2010年、p.56~61参照

3．欲望の原因：言語が生み出す不安

ラカンは以下のように言う。「人間の欲望は、その意味を他者の欲望のうちに見出す。それは欲望される対象への鍵を他者がにぎっているからというよりは、むしろ欲望の第一の対象は、他者によって認められることだからである。人間の欲望が形作られるのは、他者の欲望としてである。」[4]

人間の欲望は、他者が欲望するものを欲望することであり、他者に求められ、欲望されることである。「承認の政治」や「アイデンティティポリティックス」は「人はパンのみによって生きるにあらず。バラも必要である」という言葉に、「他者からの承認」を付け加えたが、他者からの承認は、生を駆動する人間の欲望の本質なのだ。しかし承認もまた言語を媒介して行われるため、（人は言語のフィルターを通してしか他者とかかわれない）固定した意味を持たない言葉は、人間を常に不安にさせ、完璧な満足にはいたらない。

白雪姫の母が、毎日鏡に向かって尋ねなくてはならなかったのはなぜか。最初は満足したであろう「女王様、あなたがこの世で一番美しい」という鏡からの承認の言葉も、満足よりも、むしろ不安や不満を生み出していく。一番美しいといわれている時でさえ、いつか白雪姫が自分よりも美しくなるかもしれないという可能性に怯え、つかの間の慰めとなる賞賛の言葉も、いつかはそれを失うかもしれないという恐怖に凌駕されてしまう。物語の中では果たされなかったが、彼女がもし、白雪姫を殺すことに成功していたとしても、すぐまた次の脅威（自分より美しい娘の存在）に脅かされていたであろうことは、明白なのだ。他者の承認を求める欲望に、終止符はない。なぜなら欲望は、単に欲望し続けるために自律的な運動を始めるからだ。

欲望の運動、つまり欲望が一人歩きする状況―それは、依存という形で、私たちの多くが経験する状況にもみられるだろう。そこで欠落するのは満足（楽しむこと）である。依存の対象は、アルコールやニコチンやギャンブルといった、古典的なものだけではない。買い物やヘルシーフード、毎日のエ

4　ラカン、ジャック 「精神分析における言葉と言語活動の機能と領野」『エクリ』宮本忠雄、竹内迪也、高橋徹、佐々木孝次共訳、弘文堂、2008年、p.323~440参照

クササイズなど、最初は楽しみのために始めたものに、自分が支配されていると感じることはめずらしくない。依存は、人間を満足から（楽しむことから）疎外し、欲望を一人歩きさせる。欲望の本質は、対象を得ることによる満足よりも、欲望それ自体の持続と促進だからである。

フィンク[5]は、いつも相思相愛になりそうになると、それまで恋焦がれていたはずの女性への関心が、急速に冷めてしまう男性の例をあげている。周りの人同様、彼自身も、自分の欲望は、彼女という対象に向かっていると思っているが、実は、彼が彼女を欲する第一の理由は、彼女が手に入らないということにある。だからいつも相手の女性が自分に関心を示し始めるや、彼の情熱は冷めてしまう。彼の欲望を持続させ、掻き立てるために必要なものは、「手に入らない何か」であり、その時々好きになる女性は、その役割を果たしているだけなのだ。

４．欲望の原因：嫉妬と羨望

私たちは自分たちの欲望のきっかけが、例えば行きたい大学に合格するとか、望んだ仕事に就くこと、好きな人に振り向いてもらうこと、といったように具体的な対象に向かっているように感じる。しかし、これらの欲望が、煎じつめれば、他者が欲望するものであると気づかされることもしばしばだ。どうして有名な大学に生きたいのか、いい会社に就職したいのか。自分が欲すると思っていることが、実は自分の親が、欲することであったり、友達や周りの人に、尊敬してもらいたいためであることに気づかされる。欲望の対象は、欲望の原因が投射されたものであり、欲望の原因は、常に他者に起因する。

言説という他者が欲しているということが、その対象の価値を上げ、私たちの欲望を掻き立てる。特に、他者の欲望の強度に応じて、あらゆるものに値段が付けられる資本主義では、皆が欲しがるもの＝価値のあるもの、とい

5　フィンク、ブルース 「欲望の弁証法」『ラカン派精神分析入門　理論と技法』中西之信、椿田貴史、舟木徹男、信友建史訳、 誠信書房、2008年、p. 74~107参照

う等式が、日常生活の中でリアリティを持つ。時折おこる、株や土地などの暴落によって、市場における値段というものが、固定的なものではなく、私たちの信仰に支えられた、儚いものである、ということを思い出させてくれる。しかし、それでも私たちは、高いものにはそれだけの値打ちがあるという確信から逃れることはできない。

私たちは、言語的な現実に生き、言語的に生み出される欲望を追いかける。そして、それは、何かを手に入れたいとか、何かになりたいという形だけで、現れるのでもない。例えば、トルストイの物語の男を破滅に導いたのは、「土地が欲しい」という欲望だけだっただろうか。そこには、対象に向かう欲望とは、また少し違う欲望が働いていたのではないか。それは、なにか「損をしてはいけない」というような、まさに言語的に構築される欲望だ。

日常生活を振り返ってみても、例えばポイントを貯めれば特典がもらえるという設定において、多くの人が、あと一つでポイントがたまるから、といった理由で買い物をした経験があるのではないか。ポイントをためて得をする人（それは仮想上の自分自身でもよい）がどこかにいて、その人に比べて損をするのではないかという焦りは、「ポイントのためになされる、この買い物こそが損なのでは？」という疑問をかき消してしまう。また、お金を払ったからという理由で、面白くない映画を最後まで見たり、睡眠時間が損だと考えて、深夜遅くまで退屈しながらパソコンを見ていたり、（また逆に起きてるのは損だ、という理由で眠くもないのに布団に入ったり）、「損してはいけない」という欲望は、いろんな場面で、合理的思考を押しのけて、私たちの行動を左右する。

限定販売や、既定の額の範囲で使用が認められる政務活動費も、このタイプの欲望の肥大化の原因となるのではないか。そこでは、「必要から導き出される予算」という因果関係が、「予算から導き出される必要」に逆転する。必要性ではなく、あらかじめ与えられた予算の枠が、欲望の原因になるのだ。それは「損をしてはいけない」という欲望の温床になる。

スロヴェニアの逸話に以下のようなものがあるそうだ。ある農夫の所に魔女がやってきて、「何でも望みをかなえてやろう」といった「ただし」と魔

女は付け加える「お前の隣人には、お前にかなえてやったことの倍してやる」と。かなえてもらいたい望みは山ほどある。しかしその倍を隣人が受け取れる、となるとどうだろうか。悩みあぐねた農夫は最後に「私の目を一つとってくれ」と言ったという。「損をしたくない」という人間の欲望は、「自分より得する人間を防げるなら（自分が隣人より損をしないのならば）、いっそ自分が傷ついても構わない」という結論まで導くということか。しかし、ぞっとするようなこの逸話にも、欲望にまつわる真実の一端があるだろう。

歴史を振り返ってみても、資本主義の格差と腐敗に幻滅した人々にとって、私有財産を否定し、共に栄えんとする共産主義は、理想社会の実現を約束してくれるはずだった。しかし、すべての人に生活を保障し、また計画経済による繁栄を目指したはず共産主義は、破綻してしまった。ジジェク[6]が指摘するように、共産主義国家では、平等主義の下、だれかが抜け駆けをしたり、得をしてはいけないという欲望が肥大化する。私有を認めないことで、私的な欲望をそぎ落とそうとしても、「誰かが得をしてはいけない」といった新しい欲望が頭をもたげる。欲望の完全治癒を目指す政策や試みは、失敗するということだ。

アメリカで、フロイトの精神分析を引き継いだ、アンナ・フロイト[7]は、自我の概念を強化し、自我心理学への道筋をつけた。自我心理学における自我は、発達し、成長するものとしてとらえられ、超自我とエゴの間で折り合いをつけるために、巧みに自分自身をだまし続けるフロイトやラカンの自我とはずいぶんと違うものとなった[8]。

フロイト、ラカンは、自我を成長し、あるべき姿へと発達するものとする自我心理学の立場と違い、「自我は自分自身の家の主人などではけっしてあり

6　ジジェク、スラヴォイ『ラカンはこう読め』鈴木晶訳、2008年

7　1895年～1982年。ジクムント、フロイトの娘。

8　フロイトは「自我が、信用に値する公平な審判官でないことは明らかです。自我は実に無意識的なものを否認し、それを抑圧してしまった力なのです。どうして自我が、この無意識的なものを正しく取り扱うことができると信じられるでしょうか。」とのべている。フロイト、『精神分析入門II』懸田克躬訳、中央公論新社、2008年、p.230参照

えない[9]」という。人間はみな、分裂する自我を抱えた神経症であり、それは生きている限り続く。だから精神分析では、完治を目指す治療でなく、自我と、どのように折り合いをつけていくかが、つまり一つの症状を次の症状に置き換えていくことが目的となる。(なぜなら完全な治療は死なのだからだ。)

欲望も、私たちの構成物である以上、決別を目指すようなやり方は、私たちをもっと自分自身から遠ざけてしまう。それよりも、自分の中に湧き起こる様々な欲望を見据え、それを認めたうえで、自分だけのやり方で、上手くつきあう方法を探らなければならないのだろう。そして、欲望を通じて、自分の中に抱えた他者を知り、不完全性と向き合うことは、きっと、他者理解への起点になるだろう。

9　フロイト、『精神分析入門II』懸田克躬訳、中央公論新社、2008年、p.75参照